The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	牧野信一の「父親小説」群と廉想渉の『三代』 : 父子関係を中心に
Author(s)	任, 苔均
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1998, 32, p. 29-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47945
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

牧野信一の「父親小説」群と廉想渉の『三代』

――父子関係を中心に――

任　苔　均

はじめに

牧野信一（一八九六―一九三六）が『新潮』に所謂「父親小説」の第一作「熱海へ」を発表したのは、一九二三年六月のことである。以後、「地球儀」（一九二三・七『文芸春秋』）、「スプリングコート」（一九二四・一『新潮』）、そして「父を売る子」（一九二四・五『新潮』）、さらに「父の百ヶ日前後」（一九二四・一〇『中央公論』）に至るまで、一連の「父親小説」を発表し、次第に新進作家としての地位が確立することになる。ところで過去牧野の小説は、例えば種村季弘氏の「傍流の変格私小説におけるマイナー・ポエット」[1]という指摘が示唆するように、多少とも諸家から軽視され、研究も遅れてきた傾向がある。こういう酷評の現状と批評自体の貧困は、「父親小説」をめぐる〈偏屈〉した「私小説」的観点に由来すると考えられるが、今後新しい観点から再考すべきであると思う。

さて、牧野の「父親小説」群を再評価するに当たって、同時代に韓国で作家活動をしていた廉想渉（ヨムサンソプ）（一八九七―

一九六三）の文学と比べてみるのは有意義なことであると思う。想渉は、一九一二年から一九一八年までの六年間日本に留学し、一九二〇年帰国して、自然主義文学の代表作である「標本室の青蛙」（一九二一）や「墓地」（一九二四、後に「万歳前」に改題出版）等の作品を著わした。彼は一九二六年一月、日本文壇への進出を目指して再び日本に渡るが、その夢は失敗に終わり、二年後の一九二八年、韓国に戻ってきた。この二度目の日本滞在期を経て、リアリズムの手法による父子小説『三代』を『朝鮮日報』（一九三一・一・一―九・一七）に連載することになる。

想渉の二度目の日本滞在期と牧野の「父親小説」群の発表時期との間には若干ずれがあるが、想渉が牧野のこれらの諸作品に影響された可能性も十分考え得る。[2] 現に牧野の「父親小説」群を一つに結んでみると、統一した筋を持つ一冊の見事な長編小説に変貌するが、これらの諸作品の「不在としての父」「アメリカから帰った父」「母と不仲な父」、さらに「妾を囲う父」[3] 等々の事柄の象徴する、家族という枠組みから逸脱する父親像とその放蕩の様子は、『三代』からも同様に見出されるのである。そこで本稿では、その影響関係の可能性を提言し、それを視野に入れつつ、同時代の日韓近代文学における父子関係の一断面を突き止めたいと思う。

一　〈父の不在〉と〈捨子〉意識

「父の百ヶ日前後」は、言わば「父親小説」群の最終章の性格を有する作品である。少し前後するが、小説全体像の理解のために先に述べておくことにする。特に「父の百ヶ日前後」は牧野の『中央公論』登載の第一作で、「父親小説」の中でも想渉が触れた可能性の高い小説[4]として注目すべきである。父の死後、家のことで母や叔父に対立する主人公の苦悩が次の文に浮き彫りにされている。

「真剣」とか「緊張」とか「深刻」とかいふ文学的熟語に当てはまるやうな経験を持つたことのない彼は、一寸夢見心地になつて自分の現在の境遇を客観して見たりした。――父の急死から一家の気分が支離滅裂になり、長男が慌てふためくこと、彼の細君が露骨に彼の母に反抗し始めたこと、母は自分の兄弟達と相計つて愚かな長男を排斥して善良な弟を擁立しようとすること、長男が嫉妬心を起すこと、そして彼は父の馴染だつたお茶屋に細君と共々滞留して、お蝶達を集めて不平を鳴してゐること――そんなことを思つて見ると彼は、今更のやうに自分が「非常」な境遇に面接してゐるやうな気がするのだつた。そして小説とか芝居とかに見る「悩める主人公」に自らを見立てゝ、自ら「深刻」なつもりのヒーローになつて安価な感情を煽りたてた。(5)（四）

右の文には、主人公の境遇や心境が一目瞭然に描出されている。これを要約してみると、a父の急死によって一家の秩序が崩壊している中で、b家の人間達の醜悪な姿を目撃する主人公「彼」は、c今まで一度も人生の苦境に立ったことがないが、d自分の境遇を客観して捉えることによって、小説や芝居に見る「悩める主人公」を演じている自分に気づくのである。『三代』にもこれに類似した内容の一節がある。

徳基（トッキ）は寝そべって世の中がつらいと思った。二十三歳になるまで人生の苦労といっても風邪ぐらいで、それ以外は小説や炳華（ビョンファ）の生活を通してしか知らなかったこの青年は、私生活や家庭内の問題で世の中がうるさいとかつらいとか思ったのは、恐らく今日が初めてだろう。母が愚痴を零すのでつらい気持ちになったのかも知れないが、今まで世帯の遣り繰りというものや、家族の不平というものを責任のない立場で眺めていたが、急に自分を中心に変わって、自分に責任を負わせようとし、自分もその中に捲き込まれざるを得ないからつらいのかも知れない。しかし、責任を負っていても自分の力では何一つ解決できないので、落ち込んで、つらい思いばかりしているのかも知れない。（中略）

――お祖父さんがもっと長生きされるか、それとも所帯を受け持つお兄さんでもいたらよかったのに！……

⑥

主人公の徳基は、祖父の死後、酒と女と博打に溺れ、さらに麻薬にまで手を出している放蕩者の父相勲（サンフン）に代わって家の経営を任され、苦悩しているところである。右の文の内容を先に引いた「父の百ヶ日前後」の文の内容と比べてみよう。a' 祖父の疑惑的な死によって一家の秩序が崩壊しているところで、b' 父の代わりに徳基が家長権を引き継いで、家の経営に悩まされている。引用文には現れていないが、そこには財産配分をめぐった祖父の妾水原（スウオン）チプや親類による祖父毒殺事件や、博打の費用のために金庫を壊して土地所有権利書を取り出し、それを偽造した嫌疑で警察に逮捕される父相勲の醜態などに見られる家中の騒動が背景になっている。c' 今まで人生の苦労を殆ど経験していない徳基にとって、d' それは小説や社会主義者である友人の炳華を通してしか見られぬ他人事であった。このように本稿で引用した箇所だけ見ても、両作品の構造、題材、主人公の境遇等には類似性が見受けられる。

さて、想渉の『三代』と牧野の「父親小説」群は、共通して父がアメリカ留学から帰り、西欧社会的現実に執着したあげく、家から疎外される羽目になる様子を描出している。牧野の「父親小説」の父は母との不和が原因で家を出ており、想渉の『三代』の父相勲は教会の長老であることを口実に法事を拒否し、祖父との口論の末に家から追い出され、遺産相続においても不当な待遇を受けることになるのである。このように一家の大黒柱たる父が家族の枠組みから除外されることによる〈父の不在〉というモチーフを軸に小説は展開され、そこから主人公は自我の覚醒の道を模索する。現に牧野の「父親小説」で父が家を出て妾を囲うことや、父の死がもたらす家中の騒動は、『三代』の祖父の急死や、その祖父との口論の末に家を追い出され、二人目の妾を囲う放蕩者の父の存在による家庭の不和の様子と比べると興味深いが、こういう点から、両作品の中では父或いは父性的モデルの不在という問題

が最も重要なモチーフになっていることが解る。彼らは「厳格な家父長であるよりははるかに夢想家肌の遊蕩児」[7]であり、封建的家族制度の解体者として造型されているのである。ところで、この父の不在は少し大げさに言うと、主人公の内面に一種の〈捨子〉意識[8]を抱かせているとも言える。〈父の不在〉により〈捨子〉の運命を負わされた主人公にとって、父親の真相を把握するのは自我の覚醒につながる道でもある。つまり、真の父との出逢いを実現してこそ、初めて〈捨子〉意識を逃れ、アイデンティティを獲得することができるのである。

牧野の最初の「父親小説」である「熱海へ」は、妾宅に居続ける父と不和な母を仲直りさせようと奔走する主人公の心境を中心に描かれている。しかし父とは「酒に酔つた時でない限り殆ど言葉を交さない」主人公は、「面とぶつかつては彼は「お父さん」などゝ呼び掛けたことも無い位ひだつた」とあるように、内面に深い傷痕として残っている〈捨子〉意識から逃れられず、真の父との出逢いを実現していない。「彼」の悩みの真相は次の一節に現れている。

彼は、寂しいイヤな気がした。グロテスクな不愉快を覚えた。つい此頃になつて初めて彼だけが知つた未だ見たこともない混血児の妹のことなど考へた。

（中略）どんな意味でゝも小説のやうな事柄は自分の周囲には決して無い如く思つてゐたのに、滑稽な程様々な然も不快な事があるらしい。――彼は斯んな風にぼんやり考へたりした。そのうちに彼は、斯うして坐つて、何かいろいろなことを考へたりしてゐる自分自身の存在といふものが、極めて不気味な存在のやうな気になつて、終ひには妙な恥しさを覚えた。（傍線引用者、以下同じ）

ここには父が外国で作った異母妹の存在によって、父への失望と憎悪の念に駆られる主人公の内面がよく描かれ

ている。こういう父の頽廃の姿を見抜いた「彼」が、「不快」[9]或いは「恥しさ」という感情を覚えるのは、潜在的に持ち続けていた〈捨子〉意識が顕在化する過程における内面の変化によるものとも解せられる。この異母妹のことを背景にした父との関係は、「スプリングコート」により具体化して現れる。小説の冒頭に「彼は、偶然ずつと前から自分に混血児の妹があるといふことを知つてゐた。無論、それを知つて以来もう五六年にもなるが妹を見たこともなかつた」とあるように、「熱海へ」の内容を踏まえている。「彼」の書いた小説が父の目に触れて怒りを買うが、遂に「もつと皮肉で痛快な厭がらせをやつてやりたい」(二)と思って、混血児の妹のスプリングコートを「父の掘立小屋に何気なく置き忘れて来てやらう」(五)と企む。ところが、皮肉なことに、牧野の「父親小説」群の主人公は、無意識中にこういう放蕩の父に自分を同一化(アイデンティフィケイション)しようとする。「父を売る子」に登場する芸者との関係がそれである。主人公の「彼」は、父のところに行こうと妻周子に口実を作って家を出掛けるが、実はそこには「十日ばかり前父と一処の席で出会つた若いトン子と称ふ芸者が好きになつて、またトン子に会へると思つて内心大いに喜んでゐたのだつた」(二)とあるように、別に下心があったからである。このように父の放蕩に「不快」を覚えながらもその父の姿を踏襲してしまうという主人公の矛盾した態度は、長年に渡る〈父の不在〉により無意識のレベルに潜在化してきた〈捨子〉意識が、父の頽廃の姿を目撃することによって一旦覚醒し、意識のレベルに顕在化して父への報復を謀るが、一方では父との関係の悪化を恐れる心理が働き、その一切の〈捨子〉意識による葛藤から逃れようとする形として取られたものと解せられる。このように父の真相を把握できず、ただ父の放蕩の姿を模倣するという一種の退行を演じる主人公に、まだ自我の確立の姿は見えない。

さて、『三代』にも牧野の「父親小説」群に見られる父への視線が同様に現れている。父相勲は二年間のアメリ

カ留学を終えて、帰国しては種々の社会事業に取り掛かる。その過程で、ある独立志士の家庭の面倒を見、志士の死後、その娘洪敬愛（ホンキョンエ）と不倫に陥って子供まで作るが、彼女を見捨ててしまう。

しかし父を敬う気持が強くなるにつれ、一方では父を憎む感情が起こって来た。親子の情理よりも父に対して人格的に尊敬できないという不快な感情が突然浮かび上がって来た。と同時に母と敬愛も可哀相に思われた。死んだのか生きているのか知る術もない敬愛の産んだ娘――まだ会ったこともない妹、そして自分達兄妹まで不幸で哀れに思われた。（三〇頁）

実は徳基は、つい昨日あるおでん屋で働いている敬愛に出会ったのである。彼はそのことを知らない父と向かい合っているのである。父を尊敬できないという「不快」な感情は、「熱海へ」や「スプリングコート」で父の秘密を看取してしまった主人公の感情に等しいが、それは父の放蕩の血に正面から遭遇する瞬間に感じる、自分の存在を否定されるような侮蔑の感情に他ならない。「自分達兄妹まで不幸で哀れに」思う徳基と、自分の存在に「不気味」さや、「恥しさ」を覚える「熱海へ」の「彼」の感情には相通ずるところがある。

ところで、徳基は祖父と自分の中に挟まって「封建時代から今の時代に渡って来る一本橋の真ん中辺りに立っている」父の境遇を理解し、「だから父に対して反感が起こりながらも、一方では哀れな思い、同情心が起こる」（三六頁）とも語るのである。一方、「スプリングコート」にも主人公が母と不仲な父に「同情」する場面が見出される。鈴木貞美氏は牧野信一の小説に現れるこういう主人公の心理状態について「父への断罪は、母の側に身を寄せた〈家〉の倫理に拠ってなされ、父への同情は〈家〉の倫理に相対してなされるという分裂」[10]という論考を提示しているが、これは『三代』にも同様に言えることのように思える。ただそこには、母が「家」の倫理を代表している牧野の小説に対して、『三代』は祖父が封建的思想を代表し、その影の領域に母が潜在しているというウェート

の差は存在する。とはいえ、『三代』や「父親小説」群の主人公の「不快」という感情が、こういう「家」のイデオロギーを背景にした、〈愛憎両極（アンビヴァレンス）〉の感情を喚起させる存在としての父との関係によるものであることは確かである。

その後徳基は、敬愛の家に招待され、自分の妹に会えるようになるが、父との対話の中に偶然敬愛の話題が出てくると、徳基は父の過ちを詰問する。それに対して父相勲は、「あの子は俺の子じゃないんだよ」（一〇二頁）と反駁し、責任を回避する。家長としての〈権力〉を持たない相勲は、父としての〈権威〉さえ失墜してしまう。子に対して「文化的規範的秩序の代表者」であり、「その伝達に努める存在」[11]たる父の漂流によって、人生の手本を喪失してしまった徳基は、父と同様の運命に見舞われるというアイロニーを演ずる。というのは、徳基も父相勲と同様にある独立志士の家庭の面倒を見るが、志士の死を契機にその娘ピルスンと不倫の恋に落ちるからである。このように想渉の『三代』と牧野の「父親小説」群の主人公は、父の頽廃の姿を反復するのであるが、その内面には父の姿に自分の姿を重ね合わせることによって、〈捨子〉意識を払拭し、父との関係を回復しようとする願望が潜んでいるのである。

二　母の幻影からの逃避——父との邂逅

牧野の掌編「地球儀」は研究家たちにさえ顧みられることの少ない作品であるが、父子関係の一つの原点になる作品であるという点で見逃せない。この小説は、地球儀に纏わる幼年期の思い出を題材にした短編を書きかけていた主人公純一が、祖父の十七年の法要に際して母の家に戻ってくるが、偶然母がその地球儀を見つけ出したことか

ら、その小説のことを喚起するという形式を取っている。放蕩者の父は、祖父の法要に際しても家に帰らない。法要の日に母と叔父との間には純一の話題が持ち出され、その時叔父が酒を飲む純一のことを「やつぱり系統かしら」と言うのであるが、この酒という対象を通して父から子に流れ伝わる放蕩の血を見出そうとする作家の意図が読み取れる。そこにはこの小説の冒頭に出てくる「もうお父さんの事はあてにならないよ。あの年になつての事だもの」と愚痴をこぼす母の言説が下敷きとしてある。即ち、「これは父の放蕩を意味するのだつた」という地の文に解き明かされているように、放蕩の血の継承を意味するのであるが、それが母親によって覚醒されている点は興味深い。「父親小説」群の父の洋行には、因循姑息な家風への反発と共に母との不和が原因として働いているのであるが、特に「スプリングコート」にはその原因を母との不和に帰する箇所が見出される。

「でも妾は、お母さんと一処に暮すことも御免だわ。」

「そりやア、さうだらう。」と彼は、易々と点頭いた。彼は、細君の場合とは別な意味からでも、いろいろ母の嫌な性質を、それはもう幼少の頃から秘かに認めてゐた。時々彼は、父が外国へなど行つた原因は母にあるんぢやないか知ら？と思つたり、また変に武士の娘を気取つて堪らない切り口上で亭主を説伏させやうとしたりする様などを眺めると、彼はゾツゾツと寒けを覚えて「これぢや親父の奴もさぞやりきれねエだらう。」と父に同情する場合もあつた。（二）

ここで主人公の母に対して密かに抱いていた嫌悪感は、父への同情心を誘う種となっているのが解る。それが「父の百ヶ日前後」では、父の死後母や叔父との対立の中で父の実体に邂逅し、やがて〈父の不在〉という現実を乗り越え、〈捨子〉意識を払拭する形に具体化して現れる。主人公の「彼」は「父上、私は何もいりません、私はあなたの凡ての失敗を有り難く思つてゐます」と言い、「この世に在ることも、無いことも、そんな区別はもう止

めに仕様ぢやありませんか！」（四）と言って父との和解を遂げる。主人公は父の死による実体の喪失に直面して、却って父の実体に触れ、母との対立を通して父の放蕩を容赦しかつ理解することができ、とうとう〈捨子〉意識から逃れることができたのである。

さて、想渉の『三代』にも随所に似通ったところが見出される。「地球儀」の主人公の父と同様に、『三代』の父相勲はアメリカ留学を終えて帰国するが、祖父との衝突のため、家を出ている。そこに祖父の急死に際して、子の徳基が家督を相続することになる。しかも徳基は妾を囲う祖父と父の放蕩の姿を目して、自分に流れる堕落の血に苦悶するが、その呪縛を抜け出し、個の主体的生活を求めようと奮闘する。ところが母は、芸者遊びをし、妾を囲っている夫相勲の放蕩の姿を、酒という対象を通して、子の徳基に重ね合わせて見る。小説の冒頭で酒を飲んで夜中に帰ってきた徳基に、母は「系統だから仕方ないことだけど、今からお酒に耽るといけないじゃないの」（三一頁）と言い、頽廃の血の遺伝への懸念を表すが、こういう『三代』の母の視線は「地球儀」の母の視線に驚くほど酷似しているのである。結局母の懸念通りに、父と同じ運命に遭遇してしまった徳基は、母の言葉に戦慄を覚える。

「お前も体面を取り繕わなきゃ。いくらお父さんの血筋でも、何とまあ、どうしてあんな商人風情の娘を家に引き込んでふざけているの。お前もこの家の主になった体面を取り繕わなきゃ。」

徳基はまた母のヒステリーが始まったのかと思って黙々と聞いてばかりいたが、「お父さんの血筋」という言葉には、むかっとして突然反感が起こるのだった。（中略）

「敬愛がうちに出入りするようになった始まりが何なのか分かるの？愛国志士の彼女のお父さんが獄中で重病に罹ってから出て来て、ろくに薬も買えない境涯を同情して助けてやったら、そこに得たり賢しと飛びついたんじゃないの。」（中略）

「（中略）第二の洪敬愛じゃなくて何だ。水原チプ、敬愛、ウィキョン、そして三代目はなんていうあまなの。どうしてお前はお父さんの轍を踏もうとするのかよ。」（三六八頁、傍点原文）

徳基はこの母の言説から運命的な力を看取し、「そこには一種の宿命的な恐ろしい因果が絡んでいるように思われてならないのだった」（三七二頁）と思う。妾敬愛を見捨て、二人目の妾を囲う父相勲や、嫁よりも若い水原チプという妾を囲っていた祖父趙議官（チョウイクァン）の頽廃の姿は、徳基に一種の遺伝という運命を感知させるには十分なものである。しかも父が敬愛に近づく過程と、徳基がピルスンに近づく過程は全く同じなのである。とすると、徳基がその呪縛を逃れるには、何よりも父の放蕩の意味を突き止めなければならない。父の真相を見極めることによって、自分と父との関係を放蕩の血という名の下に拘束する運命の呪縛から逃れねばならないのである。彼は「お父さん――お父さんも可哀相だ。時代的に恵まれなかった所為もある」と思いながらも、「人間の運命やら宿命やら星回りやらというのは、結局性格によるもの。性格、それを指しているようだ」（三七一頁）という結論を下し、遺伝の呪縛を逃れようとする。その後徳基はピルスンの父の死に際して、やがて「親父も俺も金持ちの子孫であるという共通点があるだけで、そこに何か宿命的な一致がある筈はない」（四一七頁）と思い、遺伝という呪縛を逃れ、自分の性格や思想や感情の通りにやっていこうと決意しながら、ピルスンを「第二の敬愛」と言った母の言葉を強く否認する。近代的自我に目覚めた徳基は、「金のない徳基」（同頁）としてピルスンのうちのお悔やみに行こうと決心する。そこで彼は、父の堕落の姿も容赦し、父の放蕩の血という呪縛を逃れようとする。

こういう徳基の自我確立の過程は、父相勲が自分の夢とは裏腹に、祖父趙議官と同じく妾を囲い、博打と麻薬に奔るという破滅的な生活に見られる、一種の祖父への報復行為と比較してみると対照的な様相を呈する。徳基は祖

父の死とピルスンの父の死という間接的な〈父の死〉を通して父との邂逅を遂げるが、これを「父の百ヶ日前後」の「彼」が実際の〈父の死〉に遭遇して父との和解に至る場面と重ね合わせてみると、前世代の〈死〉より次の世代への〈再生〉という歴史的変遷のテーマを見出すこともできる。しかもその背後には、古風な精神を押し付けようとする母に対立して父を理解し、父との関係を回復することによって〈捨子〉意識を逃れ、自我の成長を遂げるという共通点が見出される。厳父と慈母という東アジアの伝統的な親子関係とは程遠い、家から疎外され権力は勿論のこと権威まで喪失した父と〈厳母〉の姿を蔵している両作家の作品から、母の幻影という呪縛を逃れ、真の父との邂逅を遂げる主人公の内面世界の道程が見受けられるのである。そして、こういうイニシエーションを通して、主人公は自我の拡充に向かって一歩を踏み出すことになる。

まとめ

牧野の「父親小説」と想渉の『三代』は、父の不在をモチーフにして、放蕩者の父を反復する主人公を設定し、家の人間関係の中で、遂には自我の覚醒に至る過程を描出している。牧野の「父親小説」に登場する父や想渉の『三代』の父相勲が放蕩に奔る姿は、一種の過渡期的人物の典型とも言えるが、同時にそこには〈家〉という制度の破壊或いは家族の崩壊という時代相の片鱗も窺われる。〈父の不在〉のため、潜在意識の中に〈捨子〉意識を抱いていた主人公達は、真の父との出逢いを実現し、父との関係を回復することによって、葛藤を乗り越え、人間的成長への道を模索する。彼らは母の盲目的な宿命論によって放蕩の血を認識するのであるが、そういう母の言説による呪縛を逃れ、父を理解し、自我の拡充を目指して一歩を踏み出す。しかし、『三代』の徳基が家督を相続し、

一家の騒動の後始末に奔走することや、「父親小説」群の主人公が母や親戚との関係に苦しむことに見られるように、これらの作品はすべて所詮「家」のイデオロギーというものを逃れられないという時代的限界を露呈しているのである。

注

（1）種村季弘「牧野信一　母からの逃走」（『国文学』一九七四年六月号）、八一頁。

（2）想渉の二度目の来日より一年余前の一九二四年八月、牧野の初めての作品集『父を売る子』が、新潮社の「新進作家叢書」の第四十編として刊行され、また十月には「父の百ヶ日前後」が、当時の有力な雑誌である『中央公論』に掲載された。それ以後も、「『悪』（イーヴル）の同意語（シノニムス）」（一九二五・四）、「鏡地獄」（一九二五・九）、「毒気」（一九二六・一）、「蔭・ひなた」（一九二六・五）等の作品を続けて『中央公論』に発表し、そのため、長い間、牧野は所謂『中央公論』の作家と目されるようになった。想渉が当時こういう活躍ぶりを見せていた牧野の作品に触れた可能性は、例えば想渉の「文学少年時代の回想」（梁柱東編『民族文化読本』、ソウル、文研社、一九五五年）で、中学時代に文学修業を積んだ雑誌に『中央公論』の名を挙げているところから推測できる。しかし想渉が牧野の作品から影響を受けたことを直接的に証明できる資料は、本稿の段階では見当たらなかった。本稿では一種の試論として仮説を提示し、それを傍証する形で論を展開するに留めておく。

（3）鎌田広己「「父を賣る子」前後から「鏡地獄」まで――牧野信一の初期作品に認められる「知」の視点で――」（『国文論叢』第十四号、神戸大学文学部国語国文学会、一九八七年三月）、三八頁。

（4）注（2）参照。

（5）本稿の引用に当たって、牧野信一の「父親小説」群は、それぞれ雑誌初出稿に拠り、旧字は原則的に新字に改めた。尚、牧野の引用文に付してある（　）の中の数字は、その小説の章の番号を意味する。

（6）廉想渉『三代』（『廉想渉全集』第四巻、ソウル、民音社、一九八七年）三七一――三七二頁。以下引用文は頁数のみ

を記す。尚、引用文は筆者の拙訳による。

(7) 種村氏前掲論文、同頁。

(8) 〈捨子〉意識は父子関係を解く一つの鍵として注目したい。拙稿「藤村文学における父子関係の一断面――「捨子」意識をめぐって――」(『待兼山論叢』第三一号文学篇、大阪大学文学会、一九九七年)、「島崎藤村の『家』と廉想渉の『三代』――父子関係を中心に――」(『大学院論集』第八号、日本大学大学院国際関係研究科、一九九八年)を参照されたい。

(9) 鈴木貞美氏は「最も美しい魂は――牧野信一のために」(『文学界』一九八六年三月号)で、存在の不安の感覚が、階級的社会観を排除し、専ら父親の所業によってもたらされているという点から、「父を売る子」における志賀直哉の『和解』との類似性を論じている。本稿では氏の見解に同意するが、さらに両作家の諸作品に頻出する「不快」という形容語に目を留めて探ってみると、両者の間にはもっと広い意味での類似性が現れてくるという見解を提示したい。しかも趙容萬氏の「三〇年代の文化界」(『中央日報』一九八四年十一月二日)で、想渉と志賀直哉との関係を指摘している点から推すと、「不快」という言辞は、想渉と牧野と志賀の作品における父子関係を解く上で重要なコードとして働いていることが解る。

(10) 鈴木氏前掲論文、二五九頁。

(11) 松本滋『父性的宗教母性的宗教』(東京大学出版会、一九八七年)、五七頁。

(大学院後期課程学生)